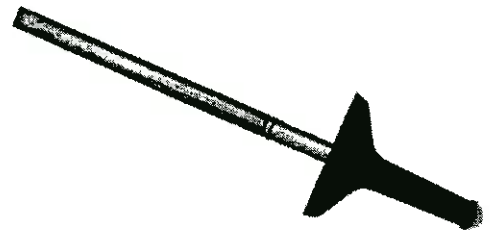


郷土博物館・文学館だより



当館では、平成 26 年 1 月 12 日まで、「オリンピックと渋谷」展を開催しています。

特に会場では昭和 40 年頃の居間を再現したコーナーが人気を集めています。



聖火トーチ

企画展

「オリンピックと渋谷」展

開催中！

今年は昭和 39 年（1964）の東京オリンピック開催から 50 年にあたります。この大会では、渋谷区には競技会場のほか選手村も設置されました。それに伴って、渋谷区内には新しい施設が建設されたほか、都市整備が行われ、今日の渋谷の街の基礎がこの時期にできました。

今回の展示では、選手村の食堂のレシピや関係者の秘蔵写真、選手村内の「サービスセンター」（設計・東京工業大学清家清研究室）と「選手村食堂」（菊竹清訓建築設計事務所）の当時制作された模型などが展示されています。



展示解説風景

東京体育館の歩み

JR千駄ヶ谷駅の改札口を出て、すぐ目の前の交差点に向かって進んでいくと、前方斜め左の方向に銀色に光る建物の屋根が見えてきます。それが東京体育館です。

現在の東京体育館は、平成 2 年（1990）2 月に新しく建て替えられたものです。設計は、代官山ヒルサイドテラスなどを手掛けた建築家・横文彦氏によるものです。東京体育館は、メインアリーナのほかにトレーニングルームや屋内プールなどもあり、さまざまな大会やイベントで使用されています。記憶に新しいところでは、昨年、第 68 回国民体育大会・スポーツ祭東京 2013 の水球競技会場となりました。

さて今年は、第 18 回夏季オリンピック東京大会が開催されてから 50 年という節目の年でした。オリンピックの開会式が行われた 10 月 10 日前後には、それを記念していろいろなイベントも行われました。当時の東京体育館は体操と水泳（水球）の会場となっており、建物も現在のものではなく、写真のような「かまぼこ」屋根が特徴の体育館でした。大会開催中はメインアリーナで体操競技が行われ、特に男子体操は前回のローマ大会で団体金メダルを獲得したこともあり、期待と注目が集まる中、見事連続して団体金メダルを獲得しました。

もともと東京体育館が建っている一帯は、徳川家正（徳川宗家 17 代）が所有していました。それを東京府が、昭和 18 年（1943）に戦時中の国民の士気高揚をはかる錬成道場として使用するために、鉄筋コンクリート造りの洋館 2 棟を含む建物と土地を買収しました。その後、

都制が施行されると民生局が所管することとなり、「葵館」と名付け、錬成道場として使用したようです。

やがて戦後になってからは、昭和 20 年 12 月から 27 年 5 月まで、駐留軍将校宿舍・将校クラブとして使用されていました。接收解除後は、一時、東京都収用委員会の庁舎にもなります。そして、その年の年末になり、東京都は体育館建設のため、まず木造建築物を解体、次に洋館 2 棟の位置を移動し、翌 28 年 10 月から東京体育館建設工事が着工されました。設計は東京都建設局が担当しました。

体育館は昭和 31 年 8 月に完成しましたが、引き続いて翌年 5 月には洋館も解体され、33 年 4 月に開催予定の第 3 回アジア大会に間に合うようにと、屋内プールと陸上競技場の工事が始まります。大会直前の 3 月にはプールと競技場が完成し、大会も無事終了、その後は 34 年の第 14 回国民体育大会、39 年の東京オリンピックと、次々と東京を代表する運動競技施設として使用されるようになりました。



旧・東京体育館

杉浦非水と翠子の愛情物語

日本のグラフィックデザインの先駆者として知られる杉浦非水は、銀座線開業ポスターや三越呉服店、カルピスの広告などの仕事が再評価されています。

明治9年(1876)、現在の愛媛県松山市に生まれた非水は、明治30年に東京美術学校日本画選科に入学し、黒田清輝の知遇を得ます。中澤弘光とともに黒田家に寄寓した時期もあり、この頃に多くのアール・ヌーヴォの資料に接したことが、図案家への転身を促しました。

若き日の非水は『明星』誌上で口絵を発表したり、田山花袋が主筆を務める博文館の児童雑誌の表紙を手掛けたりと、文学者とも盛んに交流しました。途中で中断しますが、明治34年には、中澤弘光とともに、与謝野晶子の「みだれ髪歌留多」を50枚ずつ分担しています。

明治37年、非水は同郷の隣人の紹介で、川越で代々庄屋をつとめた岩崎家の三女・翠と結婚しました。

二人は明治41年に千駄ヶ谷町穂田(現在の神宮前五丁目付近)に居を構えて以後、渋谷付近を転々とし、渋谷町伊達(現在の恵比寿三丁目付近)に移転した後、翠は大正4年(1915)から北原白秋から歌の手ほどきを受け、歌人・翠子として瞬く間に頭角を現し、アラウギを代表する女流歌人になります。福沢諭吉の娘婿であった翠子の実兄・福沢桃介も、経済的に翠子をバックアップしたようです。

しかし、齒に衣着せずものを言う翠子は、ア

ラウギの会員から反感をかい、ついには脱退を余儀なくされました。激情の矛先は夫に向けられることもあり、歌人・釋迢空は非水に同情を寄せ「翠子の家の夫の克く怨(ゆる)す日日の心のうやうやしけれ」(「杉浦夫人第五歌集跋文」)と詠っています。

こうした翠子を非水は公私ともに支え、終生穏やかに見守りました。非水の手紙から、二人を強く結び付けていたのは、幼少期、ともに養子に出され、そこで感じた孤独や不安という意識の共有であったことがうかがえます。

翠子の歌には、こうした夫への想いがあふれています。「君がさすこのうま酒に酔ひにけり君が献(さ)すゆゑ酔ひにけるかな」(大正6年『寒紅集』)、「送りこし写真を見れば我手より離れしつまはみめまさりけり」(大正14年『みどりの眉』)、「我れの逝く永遠の国にも月照るやこの病室に月のぞく窓」(昭和35年)。

翠子は、昭和35年(1960)に逝去しました。翠子の霊前に座る非水は「あなたのそんな骨ばかりの瘦腕を枕に死ねますか、と云うのですよ」と翠子を偲びながら涙していたといひます。

非水は、昭和40年に89歳で亡くなりました。



『生命の波動』昭和27年
杉浦翠子著・杉浦非水画

収蔵資料紹介

歌川広重 錦絵「広尾ふる川」

タテ 36 cm
ヨコ 24 cm



(一)で紹介する錦絵は、歌川広重の作品『名所江戸百景』のうちの一枚です。寛政七年(一七九五)に江戸で生まれた広重は、十五歳のときに歌川豊広の門に入り、その後『東海道五十三次』など数々の名作を描き、安政五年に六十二歳で亡くなりました。『名所江戸百景』は、安政三年から亡くなる直前まで描かれた一八枚からなる大作で、未完に終わりましたが、二代目広重の補筆により完成されました。斬新な構図や色彩が好評を博し、当時、大変よく売れたといえます。また、モネやゴッホなど、西洋の画家にも大きな影響を与えたことで知られています。

さてこの「広尾ふる川」ですが、その表題が示すとおり、中央に描かれている川が「広尾」を流れる「古川」で

現在の渋谷川の下流になります。川の名前は、海からの船を通すため開削した最下流部の「新堀川」に対し、それより上流の拡張されていない部分を「古川」と呼んだことに由来するようです。

川の左手にわずかに人家がみえますが、それ以外は野原や林が広がっています。当時の広尾には「広尾原」とよばれる原っぱがあり、江戸郊外の行楽地として有名でした。ただし、川に架かる橋は、現在の港区南麻布付近にある四之橋ともいわれています。もう少し上流の渋谷区寄りを描いたこの説もありますが、いずれにしても、錦絵などに描かれることの少なかつた渋谷付近において、江戸時代の雰囲気がよく伝わる資料として貴重な一枚です。

【今後の展示予定】

◆企画展「オリンピックと渋谷」展

平成 26 年 9 月 30 日 (火) ~

平成 27 年 1 月 12 日 (月・祝)

◆企画展「賀茂真淵関係資料展」(仮)

平成 27 年 1 月 20 日 (火) ~

3 月 22 日 (日)

◆企画展「第 15 回渋谷現代短歌優秀作品展」(仮)

平成 27 年 4 月 1 日 (水) ~

4 月 12 日 (日)

*第 15 回渋谷現代短歌の優秀作品を展示します。
(作品の募集は、12 月 25 日まで受け付けています。)

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00~17:00 (入館は 16:30 まで)

※震災に伴う節電を継続し、開館時間を 13:00 から変更しています。詳細については、お問合せください。

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

小()内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.27

平成 26 年 12 月 1 日発行